

京都西陣創造集団アノニム『おこんじょうり』

出演者やスタッフのお芝居にかける熱意と、演劇を楽しもうとする姿勢が伝わってくる作品でした。

民話を基にした絵本が原作であることで、その世界観を意識されたのか、それとも子供向けの作品ということで子供向けを意識されたのか、または「民衆芸（劇）」として演劇性の観点から大衆性を意識して演出されたのか定かではありませんが、民衆（庶民）の力強さ、たくましさがよく表現されていたように感じました。出演者のはつらつとした演技、時には猥雑な表現を織り交ぜたユーモア、小道具や衣装の「安っぽさ」を上手に逆手に取る演出はうまく計算されたものだと感じました。子供から大人まで幅広い観客に楽しんでもらおうという思いが感じられました。

人物はもちろん、装置の代わりや、時には抽象的なものまで演じるクロコの存在は、物語の中の世界と、目の前に存在する劇という2つの視点を観客に与えることで劇を厚くし、また低い身分の者から権力者までを演じることで、人間をすべてお見通しの神のような存在として、民話や童話を読んだ時に感じる、説明できない「感覚的で不思議な世界」に似たものを感じさせてくれました。「いたずら好きな神さま」が遊びまわっているような印象でしょうか。

人形で表現される狐は、初めて人形を使うとポストトークで話されていましたが、よく練習されており「生き物」として感情移入しやすい演技の水準であったと感じました。

メインで演じる役者さんもよく練習されておられ、セリフはもちろん感情や物語の世界観もよく伝わってきました。

台本に書かれているのでどうしようもないことですが、浄瑠璃を語ることなど、現代人、特に若者にはちょっとピンとこない文化をどう伝えるかということとは少し気になりました。また、欲を言えば、芝居の中にスパイスを利かす洗練された何か（それだけで観客を魅了する技？など）があれば、作品の芸術性はより高まったに違いありません。

杉山 準（演劇プロデューサー）